梓林太郎

槍ヶ岳 白い凶器

徳間文庫

槍ヶ岳 白い凶器

© Rintarô Azusa 1993

著者　梓林太郎
発行者　徳間康快
発行所　東京都港区新橋四―一〇〒一〇五
株式会社徳間書店
電話(〇三)三四三三・六二三一(大代)
振替　東京四―四四三九二番
印刷　凸版印刷株式会社
製本
〈編集担当　吉川和利〉

1993年9月15日　初刷

ISBN4-19-567692-4（乱丁、落丁本はお取りかえいたします）

徳間文庫

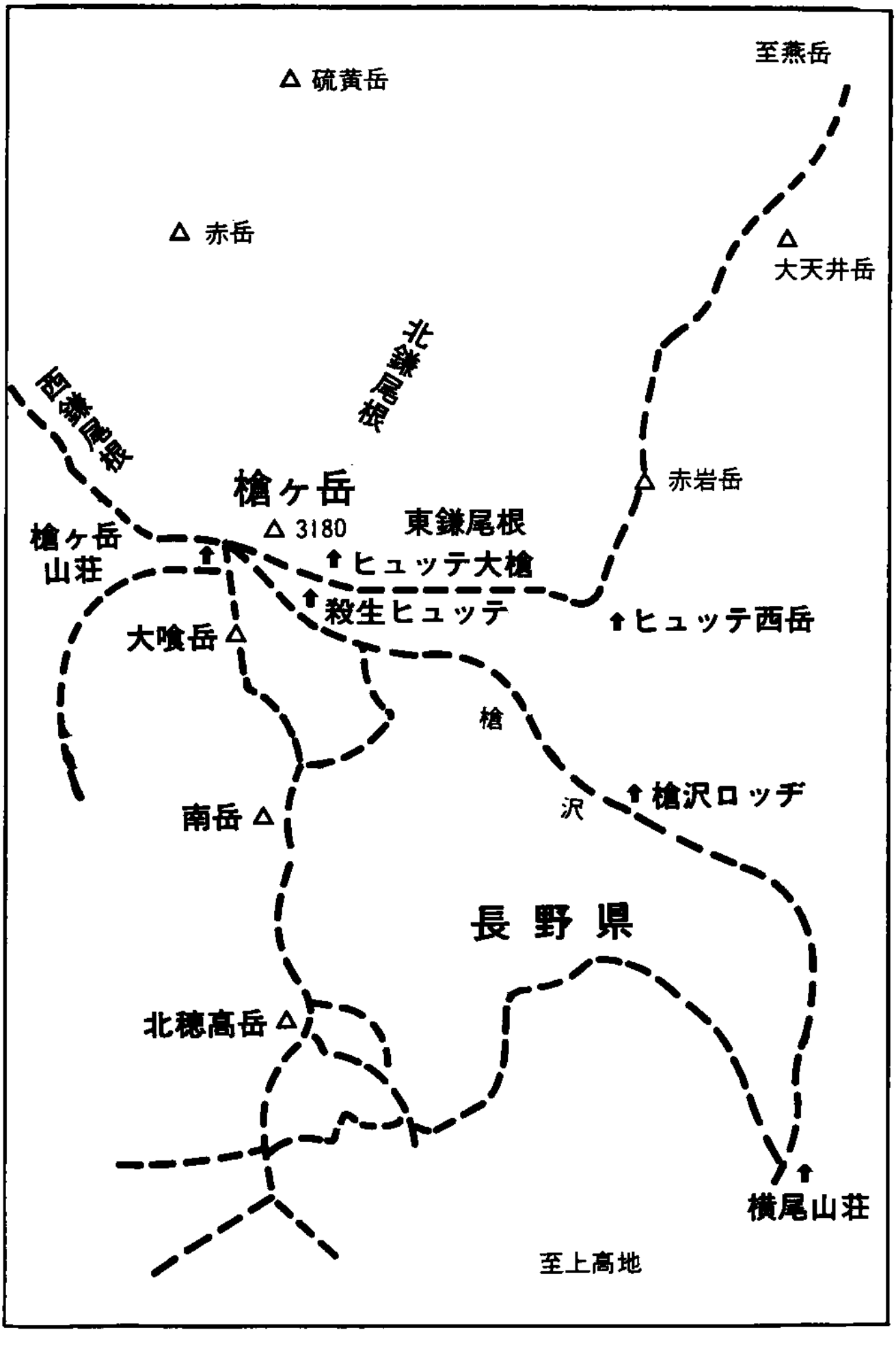
槍ヶ岳 白い凶器

梓 林太郎

目次

第一章　六本木の事件　5
第二章　目撃証言　44
第三章　槍ヶ岳の岩穴　82
第四章　死者の部屋　131
第五章　北鎌尾根直下　166
第六章　海を見る過去　210
第七章　白い凶器　244
解説　二上洋一　278

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com


至燕岳
硫黄岳
赤岳
大天井岳
北鎌尾根
西鎌尾根
槍ヶ岳
△3180
東鎌尾根
赤岩岳
槍ヶ岳
山荘
ヒュッテ大槍
殺生ヒュッテ
ヒュッテ西岳
大喰岳
槍
沢
槍沢ロッヂ
南岳
長野県
北穂高岳
横尾山荘
至上高地

第一章　六本木の事件

1

学校が夏休みに入ったとたんに、安曇野(あずみの)にはハイカーの姿が多くなった。

長野県警豊科(とよしな)署は、国道一四七号沿いにある。

「小さな警察なのね」

どこと比較したのか、そんなことをいってモルタル二階建ての署を眺める人がいる。なかには門柱を入れて記念写真を撮る人もいる。

自動車道が延長されたから車の往来も激しくなった。交通事故もぐんと増えた。そのぶん豊科署がかぶる砂埃(すなぼこり)も多くなり、道路側の窓は開けておけなくなった。

昨夜、強い雨が降ったせいか、けさは涼しい。北アルプスは、蒼(あお)く澄んだ空にくっきりと波形の線を浮かせている。

毎年、夏休みになると登山者も急増する。この頃は、遭難件数もうなぎ登りである。遭難事故防止と登山補導に、県警本部と豊科署外勤課では、穂高の涸沢に常駐隊を置いている。その第一陣と二陣がきょうは交代する。昼過ぎになると、第一陣の陽焼けした顔が下ってくるのだ。

外勤課は大わらわだが、一階の奥にある刑事課は、事件らしい事件がなくて、毎日静かなものである。

きょうは八月十日だ。署の庭のカラマツで蟬が鳴いている。

出勤した道原伝吉刑事は、いちばん年の若い宮坂の淹れた茶を飲みながら新聞を読み始めた。

「道原さん、奥さんからです」

伏見が受話器を頭の上に持ち上げた。

「康代から……」

珍しいことである。康代はよほどのことがないかぎり署へは電話をよこしたことがない。道原の記憶では一年振りぐらいではないか。

「すみません。朝から」

康代はいった。道原は一時間ほど前、彼女に見送られて家を出てきたのだった。

「比呂子が、大変なことになりました」

「なんだって？」

「たった今、東京の警察から電話がありました」
道原の一人娘のことである。
比呂子は高校三年生である。夏休みを利用して、同級生の笹野真弓と東京へ遊びに出掛けたのだ。
道原は、四賀課長に視線を投げた。新聞を読み終えた課長は、緑色の表紙の冊子に顔を伏せている。詰め将棋の研究中だ。頗る上達の遅い課長に、伏見が献呈した物である。
道原の電話に聞き耳を立てていそうな者はいなかった。
「簡単に話してくれ」
比呂子が交通事故に遭ったのではないかという思いが頭をかすめた。
「あなた、驚かないでくださいね」
そういう康代のほうが動転しているようだった。声も震えている。
道原は、送話口へ右手を添えた。
「あの子が、人を刺したんです」
「なにっ……」
つづけて出そうになる言葉を、道原は呑み込んだ。
伏見の頭が動いた。道原の次の言葉をきき洩らすまいと身構えたようにも見えた。
「分かった。……切るぞ」

康代は、もしもし、といっていたが、道原は受話器を置いた。
伏見が上目使いをした。宮坂も顔を上げた。
「遅くなってすみません」
黒縁メガネの牛山が飛び込んできた。いつも怒鳴り散らす課長はなにもいわなかった。道原が正面に立ったからだ。
「すみませんが、早退させていただけませんか」
「今の電話は奥さんからだったようだが、なにかあったのかね？」
「はい。急用ができました。私がいないと都合が悪いというものですから」
課長はいったんにらむような目付きをしたが、うなずいた。
「じゃ、悪いけど……」
伏見にいった。彼は腰を浮かせた。
「なにか起きましたか？」
タオルで顔を拭きながら牛山が野太い声でいった。
道原は首を横に振った。
通りかかったタクシーをつかまえた。刑事課の窓から伏見がのぞいているのが左眼に入った。
自宅への電話は、警視庁麻布署の刑事課からだったという。

連絡によると比呂子は昨夜十時頃、六本木のディスコ前で若い女性をナイフで刺し、重傷を負わせた。刺された女性は近くの病院に運ばれたが意識がなく、身元不明。被害者の女性も比呂子と笹野真弓が踊っていたディスコにいたのだが、口論になって、比呂子が被害者の女性を外に呼び出し、路上で腹部を刺した。付近の店からの通報で駆けつけたパトカーの警官によって、比呂子は現行犯逮捕されたということである。

道原は、悪夢を見ているような気持ちだった。康代は、畳の上にすわり込んで放心状態である。

「比呂子は、ディスコへ行きたくて東京へ行ったのか？」

そんなことを今さらきいたところでどうにもなるものではなかったが、道原は乱暴にいった。比呂子がナイフで人を刺したなんて、信じられることではなかった。彼女には非行歴などまったくなかった。

「早く支度しろ。お前も一緒に行くんだ」

畳に手を突いて立ち上がった康代は、目眩を起こしたように足をふらつかせた。

なにが原因で、ディスコの中で口論になったのか――比呂子がかつて人と争ったという話さえきいたことがなかった。口論の相手を外へ呼び出したというのが事実なら、その相手が比呂子になにかしたのではないか。それで腹にすえかねた彼女が外へ出て話をしようとしたのだろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もしや、比呂子は酒を飲んでいたのではないか――彼女が飲酒したという話も道原はきいたことがない。彼は非番の夕食時にビールを一本ぐらい飲むことがあるが、いたずらにしろ比呂子に飲ませたことは一度とてなかった。

彼女は、父親が警察官であるのを自覚しているはずだ。母親の康代は、娘の口の利き方にさえも注意を払っていた。旅行に出たことはこれまでもあるが、同行する者や行き先は明確にしている。帰りの日程を狂わせたこともない。

そういう比呂子がナイフで人を刺した。彼女はナイフを携行(けいこう)して、そのディスコへ行ったということなのか――常日頃、ナイフを隠し持っていたのだろうか。それとも、店にあったナイフを持ち出し、被害者の女性を外へ呼び出したのか。

「お前、比呂子のことでおれに隠していたことがあるんじゃないのか？」

新宿へ向かう特急の中で、道原は康代にきいた。

「困ったことがあったら、話しています」

康代は、固く眼をつむって答えた。

夏休みに、同級生と一緒に東京のディスコへ行って酒を飲み、店にいた女客といい争い、外へ連れ出して、持っていたナイフで腹を刺す。これではまるで札付きの不良のやることだ。

比呂子が東京へ遊びに行くのを許したのは、笹野真弓の姉が東京で所帯を持っている。そこへ泊まれるからだった。真弓も真面目な高校生だ。康代は、東京にいる真弓の姉理恵(りえ)に電話を

掛けて、迷惑にならないかときいた。二人が上京するのを知っているかと確認する意味があってだった。理恵は歓迎すると答えた。

道原と同じく穂高町に住んでいる真弓の両親にも康代は断わった。真弓は毎年、夏休みには姉の住まいを訪ねているということだった。

「笹野さんには電話したか？」

「奥さんも出掛けているらしくて、誰も出ませんでした」

康代はハンカチを眼に当てた。彼女は、亜麻色に緑の小さな花模様があるワンピースを着ている。四十三歳になったが、署にいる同い年の職員よりいくつか年上に見えた。

「頭を梳かしてきなさい」

列車が八王子に近づくと道原は、康代の髪を見ていった。

彼女は頭に手をやったが、白いハンドバッグを提げて席を立った。

列車はほぼ満席だった。家族連れが多かった。網棚に積まれた大きなバッグのあいだに、青のザックがのっていた。北アルプス登山の帰りだろう。

甲府辺りまでは晴れていたのに、東京に近づくにつれて空の灰色は濃くなった。

「飯を食べて行ったほうがいいな」

洗面所からもどった康代の頭を見ていった。乱れは直ったが、髪に艶がなかった。

「あなただけどうぞ」

「もう弁当は売りにこない。降りてからだよ」
康代は首を横に振った。食事などする気になれないというのだ。
「気をしっかり持て。なにかの間違いだ。比呂子を信じないのか」
道原は、康代の耳に口を近づけた。
「会社へは、なんていってきたんですか？」
署のことを「会社」と呼んでいるのだ。
「急用だといっただけだ」
「あの子のこと、ほんとだったら、あなたはもう会社へは……」
康代は、またハンカチを顔に当てた。
窓際に向かい合っているのは二十代の男女だった。二人は松本を過ぎた頃からずっと眠りつづけている。
道原は、眠っている女性の頭越しに走り去る外の風景に眼を向けた。二十四年ばかり凶悪犯人の足跡を追って、山へ登ったり、あちこち旅をしたことが車窓の風景に重なった。タバコに火をつけた。エアコンの加減で、煙が窓際の女性の顔へ流れた。康代がハンカチで、煙を払い落とすような恰好(かっこう)をした。

2

麻布署の担当刑事は池内（いけうち）といって、道原と同年ぐらいに見えた。

「事件が起きたのは、ゆうべの十時頃なんですがね、お宅の娘さんも一緒にディスコで遊んでいた笹野真弓という友だちも、自分の名前を答えただけで、家のことを一切いわなかったものですから」

それで連絡がけさになったのだと池内刑事は話した。

比呂子は加害者であるから留置されたが、笹野真弓は比呂子を残して帰るわけにはいかないといって、署に泊ったのだという。

真弓はけさになって、姉、大庭（おおば）理恵の電話番号を教えた。連絡を受けた理恵は駆けつけ、事件の内容をきいたあと、真弓を連れて帰宅したということだった。

「ご両親のことをきいても、比呂子さんはなにも答えてくれませんので、あらためて伺いますが、お父さんはお勤めですか？」

池内は、道原の眼を見てきいた。

道原の横で康代は、ハンカチを口に当てうつ向いている。

「私も警察官です」

「そうでしたか。長野県警の？」
「豊科署におります」
「豊科署といったら、上高地や北アルプスが管轄（かんかつ）では？」
「その通りです」
池内がタバコに火をつけたのを見て、道原もハイライトを出した。
「お母さんは、どちらかへお勤めですか？」
「家におります」
道原が答えた。
池内は、タバコを指にはさんで取調室を出て行った。三十半ばに見える刑事が、別の机でペンを持っている。
池内は、十分ほどでもどってきた。
「道原さん。失礼ですが、お仕事を確認させていただきました」
道原が刑事であるのを池内は知ったのだ。
「大変なことになってしまいましたが、日頃比呂子さんにはご心配な点がありましたか？」
大変なこと、というのは、加害者の父親が警察官だという意味も含まれているのだろう。
「年頃の娘を心配しない両親はいないでしょうが、比呂子は学校から注意されたり警察で補導されたことはありません。あの子は、自分で持っていたナイフで、自分の意志でほんとうに人

を刺したんでしょうか？」
「意志については、本人がなにも答えないものですから分かりませんが、ナイフによって女性を刺したのは事実です。目撃証言もあります」
「被害者の容態は、どんなですか？」
「近くの病院に運ばれましたが、依然重態です」
その女性は二十二、三歳見当だが、意識不明であるから身元も分かっていないということだ。
詳しく話をきく前に、被害者を見舞いたいと道原はいった。
「案内しましょう」
池内は立ち上がった。
病院は、麻布署から車で五分ほどだった。
被害者は処置室にいた。担当医は、池内の顔を見ると首を横に振った。危険な状態がつづいているということである。
「二度刺されていますね」
「二度……」
道原は医師の口元をにらんだ。二度刺したとなると、出会いがしらとは考えにくい。初めから殺意があったように受け取れるのだ。比呂子と被害者は知り合いだったのだろうか。
道原と康代は、処置室に入り、酸素マスクをはめられた被害者の顔に向かって頭を下げた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com